

田畑あきら子研究

—受容史を中心に—

松沢 寿重 [編]

- イントロダクション
- 田畑あきら子 受容史年譜
- 田畑あきら子 文献一覧
- 「対談：夭折の画家・田畑あきら子をめぐって」
- 「夭折の画家たち」展資料
 - ・ 田畑あきら子 年譜、解説（再録）
 - ・ 田畑あきら子 全出品作品（図版＋データ）

イントロダクション

松沢 寿重

2017年3月、田畑あきら子の作品1点(図1)が新潟市美術館に収蔵された。田畑あきら子は新潟市出身の画家であり、当館における作品収蔵はこれが初めての機会となった。

ここで田畑あきら子を「新潟市出身」と明記するには、若干の補足説明が必要である。1940年12月14日、彼女が生まれた時点での出身地の名称は「新潟県西蒲原郡巻町」といったが、同町は2005年10月10日の編入合併によって新潟市の一部となり、さらに2007年4月1日の政令指定都市移行に伴い、再編後の地名が「新潟市西蒲区巻甲」となった。「新潟市出身」とはこの間のいきさつによる。

市制施行(1889年)以来、新潟市の行政区域は周辺市町村を編入しながら拡大を繰り返し現在に至っている(図2)が、いわゆる平成の大合併以前、新潟市の面積は現在の三分の一以下で、その旧市域内のみでは自ずと作家の多様性も限られていたことから、当館では1985年の開館時より郷土作家の対象地域を新潟県全域として、作品収集や展覧会等での紹介を行ってきた。土田麦僊(佐渡市)、横山操(燕市)、佐藤哲三(長岡市)、阿部展也(五泉市)、牛腸茂雄(加茂市)など、全国的な知名度をもつ市外出身の作家たちが列挙されるが、田畑あきら子も嘗てはそうした意味での郷土作家の一人であった。当館における作品紹介の履歴は以下のとおりである。

- ① 「夭折の画家たち—新潟の作家たち その3—」(註1)
1987年1月6日～2月15日 46点
- ② 「市制100周年記念 新潟の絵画100年展」
歴史編：1989年9月1日～9月24日 1点
テーマ編：1989年9月29日～10月22日 1点
- ③ 「洲之内徹と現代画廊—昭和を生きた目と精神」
2014年4月12日～6月8日 10点

注目すべきは、早くも開館の翌年度、可成りな規模の作品展示を行っている事である。新潟の「夭折の画家たち」5人を集めた展覧会で、開催の趣旨文中「田畑あきら子は、1950-60年代の新しい美術の新鮮な刺激を、繊細な詩人的感性で受けとめました。記号、言葉、自然や身体のイメージが混交する絵画は、厳しい問いかけとやさしい慰めが相半ばする不思議な感覚の宇宙です。」と紹介している。さらには開館5年目の「新潟の絵画100年展」により、明治以降の郷土の美術史に連なる画家として位置づけている事も合わせて振り返ると、田畑あきら子は、当館の草創期以前において、すでに相応の評価基盤を獲得していたと言うことが出来るであろう。

28歳でほとんど無名のまま早世した田畑あきら子が、どのような経過を経て世に知られる存在となったのか、半世紀の時間を関する没後の受容史をたどってみたい。

* * *

田畑あきら子の一周忌となる1970年8月、東京・日本橋の田村画廊(註2)で「田畑あきら子遺作展」が開催された。会期は一週間。仲間内のささやかな追悼展であったと想像されるが、この展覧会に合わせる形で発行された『田畑あきら子遺稿集』(図3)が後々重要な意味を持つ。四六判(19×13cm)、120ページのこの小冊子は、生前親交のあった人たちの有志によって編纂され、絵画や素描作品の図版、遺稿詩集、晩年の書簡、そして友人・知人の寄せた文章が収められていた。わけても吉増剛造の関与

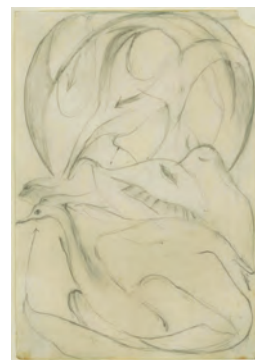


図1 田畑あきら子《(素描)》
鉛筆、紙 17.8×12.4cm



図2 新潟市の行政区域の変遷

註1 「新潟の作家たち その1」「その2」に該当する展覧会は、1985年、86年に所蔵品による常設展として、各々開催された。

註2 美術評論家の山岸信郎が画廊主となり、1969年に田村医院跡の建物を再利用して始めた貸画廊。菅木志雄や原口典之、李禹煥ら「もの派」の作家たちの揺籃の舞台となったことでも知られる。山岸は68年の田畑あきら子の個展を見ており、その事も遺作展の開催につながった一因と考えられる。



図3 『田畑あきら子遺稿集』1970年

は特筆される。

吉増は当時、詩集『黄金詩篇』（1970年）で第1回高見順賞を受賞した気鋭の詩人として、詩壇でも一躍脚光を浴びる存在となっていたが、生前の深い親交に裏付けられた“証言”の数々は、田畑あきら子受容の初期段階において極めて大きな役割を果たした。実際、関係文献を一覧しても、1970年の『遺稿集』から77年の『みづゑ』誌まで、発信者としての吉増の存在感は際だっている。この薄命の画家を忘れない、忘れさせまい、とする一群の人々の思いを恰も代弁するかのようになり、吉増は健筆を揮い、言葉を送らせた。早世の画家を惜しんで作品集や展覧会の形で追善が行われるのは必ずしも珍しいことではない。しかし、それが内輪の弔いの域を越え、不特定多数の共感を得て世に広がりを見せる例は僅かであろう。喩えを引くと、人工衛星を打ち上げて周回軌道に乗せるためには地球の重力に逆らう大推力（註3）を必要とするように、田畑あきら子の場合、吉増剛造の発信の勢いがブースター的に作用した事は、宮沢賢治の没後受容において高村光太郎の影響力が大であった経緯（註4）とも少し似ているかもしれない。

つづいて次の段階となる共感の伝播と波及は、1971年、三回忌に合わせ新潟市内のデパートで開催された2回目の「遺作展」で端緒が開かれた。その頃、新潟在住だった画家の木下晋が、『遺稿集』を通じて田畑あきら子を知り、展覧会への協力を買って出る。木下の熱心な周旋もあって、「遺作展」の後、素描41点とノート1点が新潟県美術博物館に収蔵されるが、さらに重大な展開をもたらしたのは、ほどなく木下を介して「希代の絵好き」洲之内徹の眼の中に田畑あきら子が入った事であった。

画廊経営者としてすでに10年以上のキャリアの持ち主だった洲之内が、日本の美術ジャーナリズムで確たる位置を占めるのは、1974年『芸術新潮』1月号から連載がはじまったエッセイ「気まぐれ美術館」の執筆による。この連載は洲之内が亡くなるまで14年間、165回の長きに及び、シリーズの単行書5冊は後に文庫本化、2007年にはエッセイ集『絵の中の散歩』を加えた6冊セットでの復刊もなされるなど、多くの愛読者を得て読み継がれてきた。洲之内は、この連載第26回（1976年2月号）で、「美しきもの見し人は」と題して田畑あきら子を取り上げたのである。

「ここ二ヶ月来、いつも鞆の中に一冊の詩集を潜ませていて、いうなれば、いまやその詩集にイカれてしまっている」と洲之内が書き出し近くで述べている詩集こそが、まさしく『田畑あきら子遺稿集』だ。強く惹きつけられたのは彩管のみならず、尋常ではない言葉の操り手としての魅力であり、洲之内は紙幅の多くを割いてそのことを記している。芥川賞の候補に3度挙げられた経歴を持つ洲之内もまた一廉の言葉の達人であったが、田畑あきら子の生前を直接知らない彼の眼によって、あらためて再評価の光が当てられた意義は大きい。

「気まぐれ美術館」での紹介の反響は、翌1977年に相次いで開催された3回の遺作展という形であられる。特に、東京・京橋のかんらん舎では、展覧会記念ポスター（A2判）と『田畑あきら子詩集』（B6判52ページ）（図4）が発行され、700円で販売された詩集は「150冊も売れた。買ったのはやはり、ほとんどが生前の田畑さんとは一面識もないはずの、20代の人たちだった」（註5）という。新潟県美術博物館においても1978～83年の間、作品を展示する機会が繰り返されたが、一連の評価の声も反映してのことであろう。

こうした流れの中、1985年、新潟市美術館が開館を迎え、先述の「夭折の画家たち」に向けた準備がいよいよ動き出す。この展覧会を企画担当したのは、当時学芸員を務めていた美術評論家の大倉宏であった。洲之内徹と所縁深かった大倉の情熱的な取り組みもあって、同展では田畑あきら子の生前から没後を通じた最大規模の展示が実現（註6）。以降、大倉は美術館を辞した後も田畑あきら子紹介のキーマンの一人として、

註3 軌道力学における第一宇宙速度（秒速7.9km）を得るための推力。速度が未満の場合は弾道飛行の後地表に落下する。

註4 没後4カ月で編纂された『宮沢賢治追悼』への高村光太郎の寄稿が、横光利一を通じて一次全集（1934-35年 文庫堂版全3巻）出版の契機となった。拙稿「宮沢賢治の受容における高村光太郎の位置に関する考察」『新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要』第2号（2014年）参照。



図4 『田畑あきら子詩集』1977年

註5 朝日新聞1977年11月15日（新潟地方版）掲載記事「28歳で死んだ巻町の画家・田畑さん 8年後に静かなブーム」より

註6 本紀要のpp.30～32で全出品作46点の図版とデータを載録。

折々の発信を担っていく。

大倉が関わった動きの中には、1996年に東京・京橋のギャラリー川船で開催された「田畑あきら子—絵画たちと言葉たち—」展も挙げられる(註7)。この展覧会を企画したのは南指舎という画家・写真家のグループであった。洲之内徹ゆかりの画家が中心的な役割を担い、1987年10月に奇しくも「田畑あきら子展」の準備中に急逝した洲之内の遺志を引き継ぐかのような展示内容となったことも、浅からぬ縁を感じさせよう。

新潟で長年画廊経営者として活動した藤由暁男の取り組みも欠かすことは出来ない。藤由が田畑あきら子の展覧会を主宰したのは1977年秋のことだったが、それから20年を経た97年には『白い雲の中へ—田畑あきら子詩画集』(A5判128ページ/新潟日報事業社)(図5)の刊行に際して監修の任にあたる。田畑の著作をまとめた単行の書籍として現在最も広く流布している物であり、以降はこの詩画集によって田畑あきら子を知ることになった人も多いに違いない。

今世紀に入ると、それまでの新潟—東京間のやや単線往来的な顕彰の構図からは様相が変わって、面的な動きの派生が次第に顕著となってくる。新聞や雑誌等の記事では、丹尾安典、堀江敏幸、島敦彦、川村湊など、発信力のある新たな書き手によって言及される機会が相次いだことから、認知の裾野の着実な広がりが窺えるが、ひときわの画期をなしたのは、2007年に千葉県の佐倉市立美術館で開催された展覧会「カオスモス'07 さびしさと向きあって」における作品展示であった。

ここまで述べてきたとおり、美術館での紹介は新潟県立および新潟市立の、いわゆる「地元」の美術館に限られていた。地縁を持たない館での展示が(それも単独の自主企画展である場合は尚更)容易ならざること、地方公立館の学芸員ならば身を以て知るところだ。展覧会のテーマ設定から作家・作品選び、出品交渉、予算化も含めて、担当者の熱意と手腕がより大きく問われるのは自明のことである。佐倉市立美術館の展覧会では、出品数こそ8点と多くないものの、田畑あきら子の数少ない油彩の大作に注力し、空間、壁面とも広々とした状態で見せるという“選択と集中”の展示が行われた(図6)。そして何よりも、地縁という頑迷な障壁に風穴を開け、より普遍的な評価付けへの道筋を開いた点において格段に飛躍的であった。実際、この展示は国立美術館の学芸員の目に留まり、時を置かず2008年には4点の油彩が国立国際美術館に収蔵されることとなる。

さて、新潟市美術館では作品収蔵の時宜を逸したこともあって、長いインターバルを経験するが、2014年、四半世紀ぶりに田畑あきら子作品を展示する機会を得た。「洲之内徹と現代画廊 昭和を生きた目と精神」と題する展覧会で、洲之内コレクションを一括所蔵する宮城県美術館の呼び掛けに応じて、洲之内の故郷の愛媛県美術館と町立久万美術館、そして洲之内と縁深い新潟に立地する当館を加えた4館の共同企画展として成立、出品作家46人中に田畑あきら子がエントリーされたのである(図7)。この展覧会に関連する事業として、吉増剛造と大倉宏による「対談：夭折の画家・田畑あきら子をめぐって」を催行し、定員80名の会場がほぼ満席の盛況を博した(註8)。

また、2015~16年には、「画家の詩、詩人の絵—絵は詩のごとく、詩は絵のごとく」展が、平塚市美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、姫路市立美術館、足利市立美術館、北海道立函館美術館の5館を巡回し、田畑あきら子の作品が吉増剛造の近作とともに、宮沢賢治や西脇順三郎、瀧口修造らの系譜に連なる「詩人の絵」として紹介されたことも記憶に新しい。ちなみに、同展の図録には作品所蔵館として新潟市美術館の名もすでに記されていたが、冒頭でも触れたとおり、実は当館がそこに並ぶ資格を得たのはようやく2017年のことである。

かくして、田畑あきら子は、北海道から四国まで各地の美術館でも紹介の履歴を持つようになった。大半は近年になってからの出来事である。作品の劣化を防ぐための

註7 大倉は同展のリーフレットにテキストを執筆し、5月22日の新潟日報(朝刊)にも紹介記事を寄稿した。



図5 『白い雲の中へ—田畑あきら子詩画集』1997年

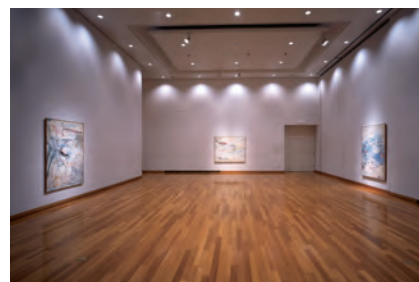


図6 佐倉市立美術館での展示風景(撮影:山本糾)



図7 「洲之内徹と現代画廊」での新潟市美術館の展示風景(写真はギャラリートークの様子)

註8 本紀要のpp.14~27で対談の内容を載録。

温・湿度や展示照度の制御、時に修復など、保存に関わる管理は、持続的な公器たる美術館が担う大きな役割だ。そこで扱われる機会、つまり「美術館入り」が目に見えて増した事実は、彼女の作品がもはや同時代的評価を越え、後世に伝えられるべき文化資産としての質を帯びはじめた証左である、と言ってあながち過言ではないように思う。

「命が断ち切られたあともなお残された作品が愛され、評価されるための条件は、じつに厳しい。(中略)短い人生のすべてと、迷いながらではあれぜったいに道を踏みはずそうとしなかった強靱な意志が作品に刻み込まれているかどうか、それがまず問われるのだ。早世にこそ、ごまかしは通用しないのである。」(註9)とは、いみじくも堀江敏幸が田畑あきら子について書いたエッセイの一文であった。時間(とき)の試練を乗り越え、数多の批評の眼に堪えてきた稀有な力に対し、我々は今、敬意を新たにしていって向き合わねばなるまい。

* * *

註9 「クロワッサン」2006年6月10日号(マガジンハウス)
掲載「彼女のいる背表紙 第28回 六月のオボロ線」より



田畑あきら子 (1940-1969)

本研究は、田畑あきら子没後50年の大きな節目を迎えるのを機に、出身地の公立美術館ならびに作品所蔵館の責務の一環として取り組んだものである。本稿を全体のイントロダクションとし、受容史年譜(p.10~)、文献一覧(p.12~)、「対談:天折の画家・田畑あきら子をめぐって」(p.14~)、「天折の画家たち」展資料(p.28~)の順に構成し載録を行った。

起稿に当たっては、武蔵野美術大学の小高優氏に調査協力のお力添えをいただき、ギャラリーみつけの小見秀男氏、佐倉市立美術館の黒川公二氏、かんらん舎の大谷芳久氏、ギャラリー川船の川船敬氏、西村久子氏からも管見を補っていただいた。作品図版の掲載については、新潟県立近代美術館、国立国際美術館のご高配を、また、文献調査には新潟市立中央図書館の助力を得た。

そして、詩人の吉増剛造氏と美術評論家の大倉宏氏からは、多大なご教示・ご助言と励ましを頂戴し、田畑あきら子のご令姉・阿部良子氏からも温かく見守っていただいた。

本研究の成立に関わる全てのご厚誼に心より深く感謝を申し上げたい。

(まつざわ・ひさしげ 新潟市美術館 主幹/学芸員)

田畑あきら子 受容史年譜

(※下線付きの項目は新潟市美術館関連)

- 1969年 8月27日、田畑あきら子、胃癌のため新潟大学附属病院にて死去。享年28歳。
- 1970年 8月24日～30日、東京・日本橋の田村画廊で「田畑あきら子遺作展」開催。
8月27日、一周忌に合わせて『田畑あきら子遺稿集』が発行される。
- 1971年 新潟日報8月26日(朝刊)に、吉増剛造が「絵にかけた若い命 田畑あきら子遺作展に寄せて」を寄稿。
8月27日～9月8日、新潟市のイチムラデパート(9階ギャラリー)で「田畑あきら子遺作展」開催。
この「遺作展」には当時、新潟に住んでいた画家の木下晋が協力。展覧会終了後、木下の周旋により、新潟県美術博物館に作品(素描41点、ノート1点)が収蔵される。
- 1973年 『波』(新潮社)10月号のシリーズエッセイ「私の中の日本人」に、吉増剛造が「田畑あきら子」を寄稿。
4月10日～5月13日、新潟県美術博物館の所蔵品展で展示。
- 1974年 3月、木下晋が洲之内徹に田畑あきら子を紹介、『遺稿集』を渡す。
『芸術新潮』8月号のエッセイ「形見」に、吉増剛造が《幻の鏡》と題して田畑あきら子の思い出を寄稿。
8月24日～9月12日、新潟県美術博物館の所蔵品展で展示。9月、同展で洲之内徹が初めて作品を見る。
- 1976年 『芸術新潮』2月号の「気まぐれ美術館(連載第26回)」で、洲之内徹が田畑あきら子を紹介。
- 1977年 7月4日～17日、巻町立郷土資料館で「田畑あきら子遺作展」開催。素描28点、油彩6点などを展示。
9月12日～10月8日、東京・銀座の画廊、かんらん舎で「早逝の画家達 I 田畑あきら子展」開催。
10月24日～11月15日、新潟市の康画廊で「田畑あきら子展」開催。
『みづゑ』11月号に、吉増剛造が「田畑あきら子の絵画：火だるまのなかの白い道」を寄稿。
- 1978年 4月4日～5月7日、新潟県美術博物館の所蔵品展で展示。
- 1979年 8月10日～31日、新潟県美術博物館の所蔵品展で展示。
- 1981年 12月12日～82年1月31日、新潟県美術博物館の所蔵品展—新潟県の作家たち—で展示。
- 1982年 4月3日～18日、新潟県美術博物館の所蔵品展—新潟県の作家たち—で展示。
- 1983年 8月27日、親族の高田一葉が自作詩集『風の地平線』に田畑あきら子の作品図版を挿入し発行。
12月17日～84年1月29日、新潟県美術博物館の所蔵品展で展示。
- 1987年 1月6日～2月15日、新潟市美術館で「夭折の画家たち」展開催。田畑あきら子の作品46点を展示。
新潟県立新潟中央高等学校の『研究年報』No.34で、後藤信行が「画家 田畑あきら子の見たもの」を寄稿。
10月28日、洲之内徹、死去(現代画廊では「田畑あきら子展」を準備中だった)。
- 1989年 新潟市美術館「新潟の絵画100年展」第1部 歴史編9月1日～24日、第2部 テーマ編9月29日～10月22日で各々油彩を1点ずつ展示。
新潟日報9月2日(朝刊)に、後藤信行が「『凝視する眼』の画家 田畑あきら子没後20年に寄せて」を寄稿。
- 1995年 新潟日報3月8日(朝刊)連載エッセイ「越佐の埋み火(第10回)」で、大倉宏が田畑あきら子を紹介。
9月26日発行の『越佐の埋み火』(新潟日報事業社)に収載される。
7月、『別冊文藝春秋』212号の「珠玉随想 春夏秋冬」に、関川夏央が「画家・田畑あきら子が残した言葉」を寄稿。
- 1996年 5月18日～6月1日、東京・京橋のギャラリー川船で「田畑あきら子展—絵画たちと言葉たち」開催(南指舎による企画)。
新潟日報5月22日(朝刊)に、大倉宏が「田畑あきら子(巻出身)19年ぶり遺作展」を寄稿。
8月24日～9月7日、名古屋市のマエダ画廊で「田畑あきら子展—絵タチト詩タチ」開催(南指舎による企画)。
10月25日～11月24日、新潟県立近代美術館で「常設展第3期 展示室3 前期特集展示 田畑あきら子」開催、所蔵品24点と遺族所蔵の油彩2点を特別展示。
新潟日報11月18日(朝刊)に、藤由暁男が新潟県立近代美術館の展示の紹介記事を寄稿。
- 1997年 8月27日、『白い雲の中へ—田畑あきら子詩画集』(新潟日報事業社)が発行される。
新潟県立近代美術館に油彩の大作1点が収蔵される。
- 1998年 4月1日～7月5日、新潟県立近代美術館で「常設展第1期 展示室2」に1点、5月19日～7月5日、「展示室3 後期展示 見えないものを表す I—新潟の作家たち」に2点展示。
9月30日発行『まきの木』69号(巻町郷土資料館友の会)に、山添利夫が「—巻町の詩人画家—田畑あきら子を思う」を寄稿。
10月18日～11月1日、新潟県民会館ギャラリーで「新潟県立近代美術館5周年 近代美術館とコレクション・新潟の美術」に1点展示。
- 2005年 日本経済新聞4月25日(朝刊文化面)に、丹尾安典が連載エッセイ「無垢の力 十選」第9回で田畑あきら子と作品を紹介。

- 2006年 10月31日～12月17日、新潟県立近代美術館で「常設展第3期 展示室2 後期展示 田畑あきら子と難波田史男」に17点展示。
- 2007年 11月16日～12月24日、佐倉市立美術館「カオスモス'07 さびしさと向きあって」開催、油彩の大作を含む田畑あきら子の作品8点を展示。
- 2008年 産経新聞1月15日（大阪夕刊）に、島敦彦が「審美のアンクル〈田畑あきら子〉と向き合って」を寄稿。
国立国際美術館に油彩の大作4点が収蔵される。
- 2010年 9月25日～11月14日、国立国際美術館「コレクション2／近年の収蔵品を中心に」で1点展示。
- 2012年 毎日新聞3月21日（朝刊文化面）に、川村湊が連載「戦後日本の青春期 安保改定後をよむ」の第21回で田畑あきら子を紹介。
- 2013年 「洲之内徹と現代画廊 昭和を生きた目と精神」（11月2日～12月23日：宮城県美術館／14年1月25日～3月16日：愛媛県美術館／4月12日～6月8日：新潟市美術館）に10点展示。
- 2014年 新潟日報5月2日（朝刊）に、松沢寿重が「昭和を生きた目と精神 洲之内徹と現代画廊展より〈5〉田畑あきら子」を寄稿。
5月10日、新潟市美術館で「対談：夭折の画家・田畑あきら子をめぐって」（吉増剛造+大倉宏）を開催。
5月20日～6月22日、新潟県立近代美術館「常設展第1期 展示室2 〈素描の妙／華〉後期展示」で3点展示。
12月20日～2015年3月22日、国立国際美術館「コレクション3」で2点展示。
- 2015年 「画家の詩、詩人の絵—絵は詩のごとく、詩は絵のごとく」（9月19日～11月8日：平塚市美術館／11月17日～12月20日：碧南市藤井達吉現代美術館／16年2月13日～3月27日：姫路市立美術館／4月9日～6月12日：足利市立美術館／6月18日～8月7日：北海道立函館美術館）に15点展示。
- 2017年 新潟市美術館に素描1点が収蔵される。
- 2019年 3月、『新潟市美術館・新津美術館研究紀要』第6号に、「田畑あきら子研究—受容史を中心に—」掲載。



1987年「夭折の画家たち」展 チラシ



1989年「新潟の絵画100年展」チラシ



2014年「洲之内徹と現代画廊」チラシ

田畑あきら子 文献一覧

【自筆文献】

- ・田畑あきら子「ノートから」『サトウ画廊月報』1968年3,4月合併号(第134号)(※1)
- ・『田畑あきら子遺稿集』私家版、1970年8月27日発行
寄稿：織田達朗／山岸信郎／吉増剛造／宮内豊／青木レイ／渡辺隆次／木暮メイ／小林裕幸／八木信子／井藤五郎／鈴木力／関口修平／西獣作／矢滝博章／丸山清六／堀越則子／石崎敏遠
- ・『田畑あきら子詩集』かんらん舎、1977年8月27日発行
- ・『白い雲の中へ―田畑あきら子詩画集』新潟日報事業社、1997年8月27日発行(※1所収)
寄稿：藤由暁男「あきら子はおかぐや姫」

【逐次刊行物】

- ・山岸信郎「展覧会評：田畑あきら子個展」『三彩』1968年6月号、三彩社
- ・「絵と詩にかけた短い一生 巻町出身の田畑あきら子さん」新潟日報1971年6月2日夕刊5面
- ・吉増剛造「絵にかけた若い命 田畑あきら子(巻町出身)遺作展に寄せて」新潟日報1971年8月26日朝刊8面
- ・吉増剛造「私の中の日本人―田畑あきら子―」『波』1973年10月号、新潮社(※2)
- ・吉増剛造「形見《幻の鏡》」『芸術新潮』1974年8月号、新潮社
- ・前田常作「形見《或る形見》」『芸術新潮』1974年8月号、新潮社
- ・洲之内徹「きまぐれ美術館 第26回 美しきもの見し人は」『芸術新潮』1976年2月号、新潮社(※3)
- ・「独特の線とトーン あすから巻で田畑あきら子遺作展」新潟日報1977年7月3日朝刊13面
- ・「郷里の巻町で遺作展 悲運の女性画家田畑あきら子」新潟日報1977年7月6日朝刊13面
- ・吉増剛造「田畑あきら子の絵画(火だるまのなかの白い道)」『みづゑ』No.872 1977年11月1日、美術出版社
- ・〈スター・ダスト／新発見の谷中安規と田畑あきら子展〉『芸術新潮』1977年12月号、新潮社
- ・「28歳で死んだ巻町の画家・田畑さん 8年後に静かなブーム」朝日新聞(新潟)1977年11月15日21面
- ・「高田教諭(下田村大浦小)の詩集でよみがえる 夭折の天才画家 田畑あきら子」新潟日報1983年9月24日夕刊2面
- ・洲之内徹「きまぐれ美術館 第110回 下を向いて歩こう」『芸術新潮』1983年2月号、新潮社(※4)
- ・後藤信行「画家 田畑あきら子を見たもの」『研究年報』1987年No.34、新潟県立新潟中央高等学校
- ・後藤信行「〈凝視する眼〉の画家 田畑あきら子没後20年に寄せて」新潟日報1989年9月2日
- ・丹尾安典「スノウチの塗りつぶし “美術批評” として読む洲之内徹」『芸術新潮』1994年11月号、新潮社(※5)
- ・大倉宏「越佐の埋み火〈10〉あいまいへの非凡な感性―田畑あきら子」新潟日報1995年3月8日(※6)
- ・関川夏央「珠玉随想 春夏秋冬／画家・田畑あきら子が残した言葉」『別冊文藝春秋』212号 1995年7月、文藝春秋
- ・大倉宏「田畑あきら子(巻出身)19年ぶり遺作展」新潟日報1996年5月22日朝刊
- ・〈STARDUST／夭折の画家・田畑あきら子 陽のあたる自画像〉『芸術新潮』1996年7月号、新潮社
- ・藤由暁男「夭折の画家・田畑あきら子展」新潟日報1996年11月18日
- ・山添利夫「一巻町の詩人画家―田畑あきら子を思う」『まきの木』69号1998年9月30日、巻町郷土資料館友の会
- ・丹尾安典「無垢の力10選〈9〉田畑あきら子 赤鉛筆のデッサン」日本経済新聞2005年4月25日40面
- ・堀江敏幸「彼女のいる背表紙 第28回 六月のオボロ線」『クロワッサン』2006年6月10日号、マガジンハウス(※7)
- ・大倉宏「〈洲之内徹と新潟〉展に寄せて 評論に本県が深く関与」新潟日報2007年10月22日
- ・島敦彦「審美のアンクル〈田畑あきら子〉と向き合って」産経新聞2008年1月15日大阪夕刊
- ・川村湊「戦後日本の青春期 安保改定後をよむ〈21〉田畑あきら子」毎日新聞2012年3月21日朝刊24面
- ・堀江敏幸(編)「特集：個人的な詩集／それと わかる」『群像』2012年8月号、講談社
- ・松沢寿重「昭和を生きた目と精神 洲之内徹と現代画廊展より〈5〉田畑あきら子」新潟日報2014年5月2日

【単行書】

- ・吉増剛造『わたしは燃えたつ曇気楼』1976年2月20日、小沢書店(※2所収)
- ・『私の中の日本人』1976年11月5日、新潮社(※2所収)
- ・洲之内徹『きまぐれ美術館』1978年8月25日、新潮社(※3所収)
- ・高田一葉『高田一葉詩集 風の地平線』1983年8月27日、私家版

- ・洲之内徹『人魚を見た人／気まぐれ美術館』1985年11月20日、新潮社（※4所収）
- ・『越佐の埋み火』1996年8月26日、新潟日報事業社（※6所収）
- ・木下晋『ペンシルワーク 生の深い淵から』2002年6月1日、里文出版（「田畑あきら子とアーシル・ゴーキー」所収）
- ・『洲之内徹と新潟』2007年10月25日、砂丘館〔寄稿：関川夏央／大倉宏〕
- ・『洲之内徹 絵のある一生』2007年10月28日、新潮社（※5所収）
- ・堀江敏幸『彼女のいる背表紙』2009年6月25日、マガジンハウス（※7所収）
- ・大倉宏『洲之内徹との最後の時間』2017年10月1日、砂丘館（※『洲之内徹と新潟』再版別冊）
- ・三供源八郎『三流の一流』2017年、ギャラリーミトモ
- ・『KANRANSHA 1977-1993』2018年9月1日、かんらん舎（※川口黎爾「田畑あきら子―天性の花開―」所収）

【展覧会図録等】

- ・「田畑あきら子遺作展」リーフレット、1971年8月、イチムラデパート新潟店（9階ギャラリー）
寄稿：織田達朗／丸山清六／前田常作
- ・「夭折の画家たち―新潟の作家たち その3―」展パンフレット、1987年1月、新潟市美術館
編集・執筆：大倉宏
- ・「新潟の絵画100年展」図録、1989年9月、新潟市美術館
- ・「田畑あきら子―絵画たちと言葉たち―」展リーフレット、1996年5月、ギャラリー川船
寄稿：大倉宏
- ・「画廊から」田畑あきら子（1940-1969）没後27年展」リーフレット、1996年8月、マエダ画廊
寄稿：まえだたもつ
- ・「近代美術館とコレクション・新潟の美術展」図録、1998年10月18日、新潟県立近代美術館
- ・「カオスモス'07 さびしさと向き合って」展図録、2007年11月16日、佐倉市立美術館
「痛みと天啓」執筆：黒川公二
- ・「洲之内徹と現代画廊 昭和を生きた目と精神」展図録、2013年11月、宮城県美術館、愛媛県美術館、町立久万美術館、新潟市美術館（発行：NHKプラネット東北）
田畑あきら子の解説：松沢寿重
- ・「画家の詩、詩人の絵―絵は詩のごとく、詩は絵のごとく」展図録、2015年10月10日、平塚市美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、姫路市立美術館、足利市立美術館、北海道立函館美術館（発行：青幻舎）
田畑あきら子の解説：大下智一

対談：夭折の画家・田畑あきら子をめぐって

2014年5月10日14:00～15:30 於：新潟市美術館 講堂

講師：吉増剛造氏、大倉宏氏

吉増剛造（よします・ごうぞう）氏

1939年東京生まれ。詩人。慶應義塾大学文学部国文科卒。大学在学中から旺盛な詩作活動を展開、24歳のとき詩集『出発』でデビュー。以後先鋭的な現代詩人として今日に至るまで国内外で活躍。朗読パフォーマンスの先駆者であり、現代美術や音楽とのコラボレーション、多重露光の写真、映像作品など活動は多岐にわたる。主な詩集に『黄金詩篇』（1970年／思潮社／高見順賞）、『オシリス、石ノ神』（1984年／思潮社／現代詩花椿賞）、『螺旋歌』（1990年／河出書房新社／詩歌文学館賞）、『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』（1998年／集英社／芸術選奨文部大臣賞）、『表紙omote-gami』（2008年／思潮社／毎日芸術賞）など。2003年紫綬褒章。2013年旭日小綬章、文化功労者。2015年より日本芸術院会員。2016年「声ノマ 全身詩人 吉増剛造展」東京国立近代美術館、2017～18年「涯テノ詩聲 詩人 吉増剛造展」足利市立美術館、沖縄県立博物館・美術館、渋谷区立松濤美術館で開催。



吉増 剛造 氏

大倉宏（おおくら・ひろし）氏

1957年新潟県生まれ。美術評論家。東京芸術大学美術学部芸術学科卒。1985～90年新潟市美術館で学芸員として勤務後、フリーとなり、新潟を拠点に美術評論を行う。著書に『東京ノイズ』（2004年／アートヴィレッジ）、共著に『越佐の埋み火』（1996年／新潟日報事業社）、編集・構成に『洲之内徹の風景』（1996年／春秋社）。現在、認定NPO法人新潟絵屋代表、新潟まち遺産の会代表、砂丘館（旧日本銀行新潟支店長役宅）館長。長岡造形大学、新潟大学、新潟デザイン専門学校講師。2009・12水と土の芸術祭アドバイザー。



大倉 宏 氏

大倉

みなさん、こんにちは。今日は私が聞き手のような感じで、田畑あきら子さんを巡って吉増さんからいろいろお話を伺いたいと思いますが、最初に、田畑あきら子さんのことをご存知ない方もいらっしゃると思いますので、私から簡単にご紹介させていただきます。それから、今この美術館で開催中の「洲之内徹と現代画廊」展に田畑さんの作品が並んでいるわけですが、洲之内徹さんとの関係も少しお話をさせていただいた後で、生前の田畑さんと親しくされていた吉増さんにお話を伺っていきたいと思います。

田畑あきら子さんが28歳で亡くなられた翌年に、『田畑あきら子遺稿集』という友人たちの手で出版された詩画集があるのですが、そこに載っている略歴をまず読ませていただきます。



- 1940年12月14日 新潟県西蒲原郡巻町に生まれる
- 1959年3月 新潟県立巻高等学校卒業
- 同年4月 武蔵野美術大学洋画科入学（註1）
- 1963年3月 同大学卒業
- 同年 日米仏一美術・デザイン大学作品展に出品
- 1964年 椿近代画廊にてグループ展
- 1965年4月 武蔵野美術大学図書館に司書として務める

註1 既存資料の大半では、田畑あきら子は「1959年武蔵野美術大学入学、63年同大学卒業」とされている。しかし、通称「ムサビ」の大学制度への移行は62年の事で、それ以前は校名も法人名も「武蔵野美術学校」であった。『武蔵野美術大学六〇年史：1929-1990』には、美術大学設置に伴い美術学校（本科）は学生の募集を停止し、64年度に最終卒業生を送り出した後、廃止となった事が記されている。田畑あきら子の場合、学士称号の授与を伴う美術大学の卒業ではなく、武蔵野美術学校本科西洋画科入学、同卒業、というのが公式な学歴の表記となる。彼女が「ムサビ」の正統な学校カリキュラムの卒業者である事自体は全く揺らぐものではないが、情報に精確さを求める際には留意が必要である。

同年 国立にてグループ展
 同年 椿近代画廊にてグループ展
 1966年 新潟市にてグループ展
 1968年 4月 サトウ画廊にて個展
 1969年 1月 サトウ画廊での6月個展を企画、準備を始める
 同年 3月14日 新潟大学附属病院にて手術、胃癌と診断される
 同年 8月27日 癌のため、新潟大学附属病院にて死す 満28歳

ということで、生前、いくつかグループ展に出品された他には、個展を一回だけ開いた。そういう意味では、無名のまま亡くなられた人でありました。

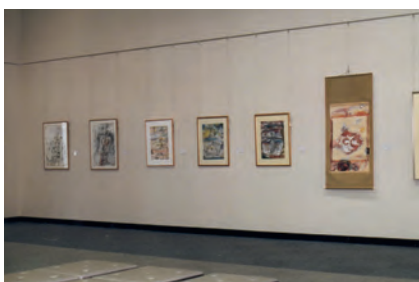
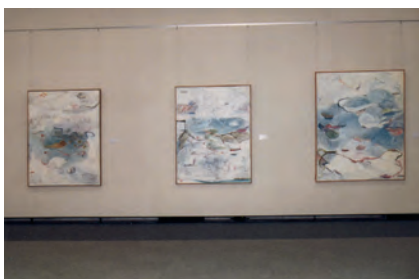
田畑さんのことを多少知る人が増えるようになったきっかけの一つが、洲之内徹さんが、『芸術新潮』で紹介したことだったのではないかと、思います。先月、画家の木下晋さんの講演会がここでありましたけれども（註2）、洲之内徹さんと親しかった木下晋さんが当時新潟に住んでいらっやあって、田畑さんの遺作展を見て、「これは凄い画家だ」ということで、洲之内さんに紹介したところ、早速彼女の絵に惹かれて、『芸術新潮』の連載エッセイ「気まぐれ美術館」で「美しきもの見し人は」という題で、田畑さんのことを書いたのですけれども、その時に洲之内さんは『田畑あきら子遺稿集』を手にとって、絵だけではなく彼女の詩にも非常に引き込まれて、随筆の中で紹介していらっやいます。おそらく、田畑さんのことを新潟以外で知る方が多いのは、この洲之内さんの文章、それから吉増さんもいくつかの雑誌で田畑さんのことを書かれています、それらを通じてということではないかと思えます。

私は、1985年から90年まで新潟市美術館の学芸員を務めておりまして、1987年の1月に「夭折の画家たち」という展覧会を企画担当させていただきました。その時に、洲之内さんが紹介した佐藤清三郎、田畑あきら子ほか3人の作品を展示させていただきました。田畑さんの作品も50点くらい並べたかと思いますが、その会場を洲之内さんは実際見に来て、2時間ほどかけてゆっくり見てくださいました。一番天井の高い第3展示室というところに、田畑さんの白い油絵を5点くらい掛けてあとは素描を並べたのですが、洲之内さんはその前に立って、顔には満面の笑みを浮かべながら、「田畑あきら子は大家だねえ……」としみじみとした感じで仰った、そのひと言を大変よく憶えています。そして、現代画廊では田畑さんの遺作展は一度も開かれなかったのですけれども、洲之内徹さんは、その年10月亡くなられる直前に、田畑さんの遺作展を計画されていました。実は、私は亡くなる直前にお会いしているのですけれども、その時、展覧会のパンフレットに載せる原稿に、私が「夭折の画家たち」展で書いた文章の一部を使いたい、という話をされたその翌朝倒れて入院され、お亡くなりになってしまった。……というわけで、幻の現代画廊での田畑あきら子展があったことをお伝えしておきたいと思えます。

吉増さんとは、その「夭折の画家たち」展の準備中に一度お会いしました。それから、1989年にここで西脇順三郎さんの展覧会を担当させていただいた時には、西脇さんともご縁のありました吉増さんに原稿を依頼して詩を書いていただきました。その時、アイルランドへ行っていた吉増さんから、もうギリギリこの日に必ず原稿が入らなければ収録の入稿に間に合わない、もうダメだという、その日の朝にカタカタカタ……と音がしてファックスで原稿が届いたのを、とてもよく憶えています。

吉増さんは、亡くなる前の数年間の田畑さんと親交がありました。そして亡くなった後も、田畑さんについて、いくつも文章を書いていらっやいます。今日は、吉増さんが出会った田畑さん、それからいま、あらためて感じている田畑さんについてお話を伺いたいと思えます。吉増さん、よろしくお願ひいたします。

註2 この対談に先立ち4月27日に開催した木下晋による講演会「洲之内徹が愛した新潟」。



「夭折の画家たち」展 田畑あきら子作品の展示

吉増

みなさん、今日はようこそお出で下さいました。

いやあ。こんなふうにして……図版で見たり、本で読んだりするのは違っていて、今日は、みなさんと同じように洲之内徹さんの、ちょっと常人ではないような「美」に関する力に触れて……先ほど展示されている田畑あきら子さんの作品の前に立ってみまして、今ここの展示室に6点(註3)くらい並んでいますけれども、大倉さんが「白い」と仰いましたが、あそこだけに白い光の幕がかかっているっていうのかなあ……本当に不思議の感に打たれました。亡くなられる寸前に、今日もお見えのお姉さんが付き添っておられて、新潟の病院にシャネルの香水かなんかを持ってお見舞いに行きましたが、それから45年経ってみて……この絵の前に、彼女の命の光が残したような……そういう、絵が残るっていうのは何とも、こう……不思議な、おそろしいものだ、と思って、私も洲之内さんと同じように、どなたも見えていっしやらなかったら、1点盗んでいきたい……みたいな……。もちろん、田畑さん本人のことも知っていますし、いろいろなことは知っていますけれども、作品……作品といたらいいのかなあ……作品という言葉じゃないなあ……絵の向こうから、語りかけてくる彼女が生前に出していた声よりも、もっと高いところから聞こえてくるものを聴くような気がして、何か……こう……心が、しーん、とじてしまいました。

そこを原点にしてでしょうか、どうして……西蒲原郡とか、巻町とか、あるいは「あ、き、ら、子」という不思議な一字余りみたいな名前を、どうしてこんなに鮮烈に憶えたのかなあ……もちろん、新幹線もまだ無い(註4)ですから……なかなか筆まめで手紙をよくくれた人で、新潟から、巻から帰ってくる時の雪景色だとか、お話ししながら思い出していますけれどもね……その沿線の様子とかなんかを伝えてきてくれた、あの田畑あきら子さんの胸の底の……そうだなあ、西脇さんの絵も、この白おい、蒼おい感じがありますしね、あれが信濃川と雪のスピリットみたいなものですけどね……良寛さんにもそういうところがあるし……。だから、おそらく、もう一度、西蒲原郡巻、あるいは新潟、信濃川、この風土の光とももう一度出会って……それで絵というものが残るっていうのは不思議なものだなあ……と思って。ちょっと、こう……いろいろな事は、頭の中にお話しようと思う情報はいっぱいありますけれども、それをはるかに越えて、何か気持ちが、しーん、としちゃっています。

もし、まだご覧になっていませんでしたら、ぜひ……やっぱり、図版で見るとは違うもんなあ、紙の声だとか、鉛筆や油彩の、こう……モノの奥の声みたいなものも聞こえますからねえ……。やっぱり、そういうモノがそこに残っているっていうことの途方も無さ、それにまず打たれた。

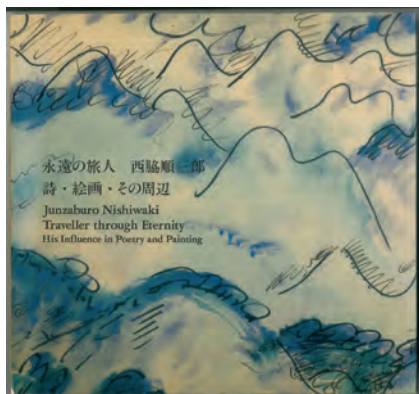
それから、新幹線の中で、洲之内さんのもそうですけれども、大倉さんの文章を読んでいて、本当に感心したところがありまして、私の言葉で言い直すと、我々が感じる世界というのは、それほど明確ではなくて、ぼうっとして曖昧な状態、その曖昧な状態が宙吊りになった状態のまま、それを、自分の命の方に引き込むようにして表現した、という……私のとらえ方ですけどね……そういうふうにしてらっしゃる大倉さんの見事な文章も加わって、ちょっと、45年経って……「おい、あきら子、お前、凄えなあ」という……。もう、半世紀近くが経って、青春時代の一時期をともに過ごしましたが、その時は絵なんか描かなかったけれど、「私も、下手な絵を描きだしたよ。もしかしたら、カルチャー・センターへ行って油絵を勉強して、やるようになるかもしれないよ……」そんなことを、田畑あきら子さんの絵の前で、呟いていました。

ああ、それで、大倉さんの言われた「西脇順三郎展」、初めての「西脇順三郎展」です。その話もしましょう。これが、なかなかいいカタログで、私がギリギリで送った

註3 「洲之内徹と現代画廊」展に出品された田畑あきら子作品は10点だが、このうち素描8点は、4点ずつ半期で展示替えを行った。「展示室に6点」というのはこのためである。

註4 上越新幹線が新潟一大宮間で暫定開業したのは、1982年11月15日。それ以前の新潟―上野間は、在来線の特急で4時間以上を要した。





「永遠の旅人 西脇順三郎 詩・絵画・その周辺」展図録
1989年、新潟市美術館



原稿の、そのホテルの空気や佇まいまで憶えていますよ。アイルランドのベルファストのホテルからでした。ようやくと送れて。まだファックスがそれほど普及してなくて、もうファックスと闘うのが大変だったですけどもね。それで、西脇さんに捧げる詩を書いて、「こんな土は、何処にも無いぜ」っていう、そういう行を題にした、これは今でも好きですけども。「ようやく書けたあ……」という気がしたんでしょうね。これ、素晴らしいカタログです。これは大倉さんがおやりになった新潟市美術館から始まって、そして次に鎌倉（神奈川県立近代美術館）で行われて……というふうになっていきますが、これが西脇さんの初めての展覧会で、カタログも大事にとってあります。

大倉

ベルファストという所には今も行ったことがなくて、どういう場所かは知らないのですけれど、その時の、吉増さんのファックスでカタカタ……っていう音とともに大変鮮やかに憶えています。

吉増さんが今語ってくださった文章というのは、たぶん、1987年に私が担当させていただいた「夭折の画家たち」展の時に書いた文章だと思いますが、正直に言うと、その時に田畑さんの絵をよく見て書きましたが、やはりどこか洲之内さんの文章を通して見ているところが当時はあったんじゃないかな、という気がいたします。ただ、それから私も30年経って、あらためて今回見て、洲之内さんが「大家だねえ」と言った、その気持ちを私なりにあらためて感じています。

今回の「洲之内徹と現代画廊」展は、仙台の宮城県美術館でも見ておりまして、個人的には先に見たせいか、全体の印象は宮城の展示の方が私は良かったのですけれども、ただ、田畑さんに関しては、新潟で見た今回の展示がすごくいいんですよね。それで何故かなあ……ってよく分からないんですけども、もしかしたら「新潟で見る」ということもあるのかなあ……とも思っていて。昨日、田畑さんの絵を凄く好きな絵描きさんと話をしている、東京から来られた方ですが、「東京から新潟へ来ると、雲が全然違う」という話になりました。雲がすごく低くて、触れそうな感じがする雲なんですね。田畑さんの絵について、吉増さんは「ブツブツ……」と仰いましたけれども、図版で見ても分からないのは、特に油絵は肌触り、と言うのかなあ。あの白い絵は本当にブツブツとしていて、まるでアイスクリームかシャーベットを掻き回したような、ブツブツがいっぱいあるんですけどね。30年前には、ちょっと若いというか、未消化な感じに見えたのに、今はそれがすごく入ってきて、まさに新潟の雲のように、遠い手で触れない所にあるのに、触れそうな感じがする。風土ということで見たい、というわけではないのですが、それはやはり、新潟で田畑さんの絵を見る、という事とつながっているのかなあ……という気がして、昨日の夜考えていました。

吉増

先ほどは自分の言葉にしましたけれども、大倉さんの書かれた文章でどこに感心したかと言いますとね、(註5)

人間というあいまいな場の全体が、あいまいな形のままキャンバスや紙の上に——次がすごいんですよ——こすりだされる——っていう所。きっと大倉さんは無意識に書いているに違いない。だけど、その「こすりだす」って言う時に、こうやって色をつけたり線を引いたり、そしてそれをもう一回、消すか直すかする、そういう動作が、この大倉さんの「こすりだす」という、こういう所に、「ああ……。これで……。これで絵が見えてくるなあ……。」という瞬間がありますね。

このあいまいさへの強烈な感受性は、スケッチブックの余白などに記された詩や、

註5 ここで吉増が紹介している大倉の文章は、新潟日報1995年3月8日（朝刊）に掲載されたエッセイ「越佐の埋み火（10）あいまいへの非凡な感性—田畑あきら子—」からのものである。

病床で書かれた手紙にも一貫し、一定している。恣意的とあいまいさの違いを、彼女ほど徹底して追い続けた画家もいない。——こういう文章なんですよ。

この「こする」という言葉で解るんですけども、現物の言葉が書かれているのを読み取ろうとしても、読み取ろうとするようでは解らなくて、たぶん、洲之内さんも仰ってますけど、かなり普通言われる「遅い」というのとは違った、こすりつけるような、ギリギリギリギリ……ギリギリ、ギリ……というような、そういう全然別なこすり方によって書かれた文字が、あそこにあるんだと思う。だから、読み取ろうと思うと拒絶される。……不思議ですよねぇ。

大倉

不思議ですね。その絵に言葉が書かれてあるんですけども、あの言葉は……詩……っていうのかなぁ。

吉増

この辺からそういうところに入っていきますけれども、私は実は彼女……これは話していいことなのか……じゃあ仮に「W氏」と言っておきましょう。ずっと何度か別れたり一緒になったりを繰り返した、かなり有名な画家になった男性と、ある高等学校の親しい友人を通じて……その友人が「W氏」と同じ中学校の同級生で、それで知り合ったはずなんです。そして、それを……何と言ったらいいのかなぁ……怪物的な画家でして、その怪物的な画家と、田畑あきら子という、今になると感受性の皮膚が完全にこんな感じで残るような奇跡的な女性が、何度も何度も一緒になったり別れたりを繰り返している、すぐ傍に、1965年、66年、67年、68年と、かなり密接な……まぁ、今こうやってお話してみると、武蔵野美大に行っているこの二人が同じ絵を描く種族に属していながら、しかも、もっとも苛烈な時に、どうして一緒に居られるのだろう？……という、その興味が、未だに残っておりますけれどもね。だから、私も同年代ですから、私の命の核みたいところでそれが痕跡を残していて、こちらもその自分の心の皮膚を絵のかたちにしていくような時期が50年経って来ている、そういう状態にありますので。なかなか単純に過去に戻ることは出来ませんが。いま大倉さんの仰った、言葉が絵の中に入ってくる、これは非常に近い友人の画家の証言ですと、その当時の絵描きさん仲間のアイドルは武蔵野美大の先輩でもあった、ニューヨークで華々しい活躍をしていた荒川修作さんだったんです。私も荒川さんの作品が好きで、非常に白っぽい巨大な画面で、そこに言葉が出てきていた。私たちも……田畑さんも私も、「おもしろい、素晴らしいねぇ」という話をしていたのを憶えています。ところが、ある近い友人の画家が、もしかしたら、田畑あきら子さんの方が、言葉のようなもの……ああ、これはアーシル・ゴーキーともつながってくるなぁ……アーシル・ゴーキーや、アンリ・ミショーなんていうと、象形性が絵画の中にありますからねえ……。言葉って言う必要はなくて、こすりつけるようにして言葉に近いものが出てきたのは田畑あきら子の方が先だ（註6）、っていう証言がありました。これはあとさき、というよりも……私もそれは判断する必要は無いような気がしますが。たった今、彼女が好きだったアーシル・ゴーキー（註7）、あるいは他の絵描きさんのことを考えてみると、大倉さん、必ずしも「言葉」って言わないでもいいかもしれない。ね？

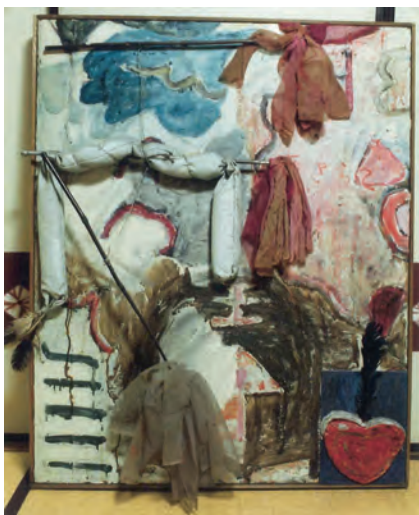
大倉

そうですね。言葉と絵が発する場所が……最終的には違う所があるとしても、さかのぼって行くと、そんなに違わない場所があって、其処にいつも触ろうとしていたというか、そういう人だったという気があらためてするんですよ。



註6 新潟日報1971年6月2日（夕刊）掲載の記事の中で、巻高校の先輩の画家である鈴木力も、同様の指摘を行っている。

註7 1963年7月26日～8月11日、池袋西武百貨店でアーシル・ゴーキーの素描50点による展覧会が開催されているが、田畑あきら子がこれを見て影響を受けた可能性については、洲之内徹が「気まぐれ美術館」の中で触れている。また、61年12月の「みづゑ」No.681では、アーシル・ゴーキーの特集が組まれるなど、60年代前半は、ゴーキーの日本への紹介が一つのピークを迎えた時期でもあった。



〈参考〉田畑あきら子作品
油彩 オブジェ 1965-66年 100×80cm

註8 この対談の当日は、諸般の事情によって「W氏」の実名は伏せられていたが、吉増の処女詩集『出発』の装幀を渡辺隆次が手掛けた事は、すでに周知の事実となっている。また、渡辺と田畑あきら子との実際についても、洲之内徹が「気まぐれ美術館」第110回（『芸術新潮』1983年2月号掲載）の中で詳述している。



『黄金詩篇』1970年、思潮社
第1回高見順賞を受賞した吉増剛造の出世作。

お話に出た「W氏」には、私も「夭折の画家たち」展の時にお会いしてから、30年来お付き合いをさせていただいていました。その「W氏」から、田畑さんと過ごした時期について、いろいろ伺ったんですけども、とてもお話出来ないような事も多いんですけども、今からは信じられないような時代の空気みたいなものをそのお話を通じて感じたんですね。その辺はやはり、吉増さんがその時代を同世代として生きていらした、しかも身近に田畑さんが生きていらした空気感をぜひ聞かせていただきたい、と思うんですけども。

吉増

持ってきた1973年に書いた文章を読んでみようと思いますけれども……考えてみると、1966年、67年、68年っていうのは、これはいわゆる60年代と云われるあの時代の最も、こう……炎のような時期ですからね。しかも、武蔵野美大は吉祥寺にありますけれども、吉祥寺とか、国立とか、あの辺が彼らの溜まり場で、国立で「W氏」と一緒に住んでいた時もあったし、私は井の頭に下宿していた時もあったし……あきら子さんは武蔵野美大の図書館の司書をやっていた時期があって、あの辺ですよ。そして、展覧会を国立の「ロージナ」という所（喫茶店）でやられた後、60年代の一番激しい街、場所というと新宿ですからね、新宿の風月堂のすぐ傍にあった椿近代画廊という所で、いまだにそこで立って見ているような記憶が身体に残っていますけれどもね、田畑あきら子さんの作品を驚愕して見た覚えがありました。それが、なかなかこれは出品できないはずで、自分で普通に着ている赤いワンピースか何か、それをカンバスに貼り付けて、胸にハート形をはめ込んだ作品で、なかなかちょっと絵画には無い、これは彼女の別の才能だなあ……。文字をすり込むのと同じような、こちらへ出てくるようなオブジェ性と言ってもいいような、そういうものがあって。しかもそれを、後で本人に聞いたのだったか「W氏」に聞いたのだったか、「あれ、展覧会が終わったら、あそこから外して自分で着てるぜ」って。「えっ!」と思って、その驚きは決して消えません。だから、今こうやって皆さんにご報告しながら、その、おそらく同時に、いま大倉さんが訊いてくださった1960年代後半のその時期、しかも、美術学校の生徒っていうのは、一番、時代の先端を感じ取る力があるわけですよ。だからねえ……いやあ、これは……病気になるわけだなあ……。

田畑さんにとってはとても静かな感じなんです。ところが、ほとんど連日のように手紙が来る。その手紙が……私は詩を書いていて、その最初の『出発』という1964年に出した詩集は「W氏」の装幀なんです（註8）。ここから先の話は懺悔ですけども……。次の詩集の出る前に、田畑あきら子さんは亡くなってしまっても、その時に、何かその勢いなんだなあ……「田畑さん、装幀の案を作ってみない？」って私が言っているはず。それで、装幀の案まで行っているはず。お姉さんから見せてもらった覚えがあった。ところが、そういう時代の激しい時期で、出版の側も、その当人気のある人と組み合わせよう、という意図があって……それで、結果的に……その経緯ははっきりとは覚えていませんけれども、担当の編集者が田畑さんとも友達で、その辺の事情も……まあ、細かい事は分からないなあ、時代の力なのかなあ……。結局、赤瀬川原平装幀の『黄金詩篇』という本になりました。だから、あきら子さんとお姉さんには、私は……お詫びをしないとイケない。でも、そう言いつつ、そんな単純なものじゃなかったなあ……。やはり、ちょうど千円札事件もあったし、その時代の苛烈さみたいなものと、まあ赤瀬川さんなんかはピークだったし。この本が出た時には「ウンコ色」なんて言われて赤瀬川さんはクサっていましたが、いや、これは……この力は赤瀬川さんでないと出せなかった……。そうした、悪びれて懺悔するだけではなくて、今となったら取り返しもつかないような激しい炎が渦巻いていた

……そういう時でしたね。

大倉

「W氏」からは、当時の二人の学生の生活を知ってもらうために読んでほしい、と言われた本があるんです。それが赤瀬川原平さんの『雪野』という本だったんですね。当時の武蔵野美大の学生がいかに貧乏だったか、という事を伝えようとされたんだと思いますけれども、赤瀬川さんの学生時代を回想した本です。そこでは赤瀬川さんたちが食べるものがなくて、畑に行って野菜を引っこ抜いて食べた、という事が書かれています。「W氏」と田畑さんの生活は……家畜小屋って言ったかな、農家の小屋の一画を区切った所、三畳か四畳くらいの部屋に、実は二人で最初の頃暮らしていた、と聞いたことがあります。「W氏」から私が聞いたのは、田畑さんは、「W氏」は武蔵野美の短大の方にはじめ2年間通って、3年生の時に田畑さんと出会っているのですけれども(註9)、出会った頃の田畑さんの印象は、非常に目立っていた。というのは、武蔵野美大でとにかく一番汚い格好をして、身なりを全く構わないような、そういうところで大変目立っていた、という事を何度も語ってくださったのをよく憶えています。吉増さんが出会った頃の田畑さんというのは、どんな感じだったんでしょうか。

吉増

これを読みながら思い出してみたいな、と思っていたんですけれども……記憶よりも書いた文字の方に、それこそ絵までは行かないけれど、何か残っているのでしょうか……新潮社が出している『波』というPR雑誌、1973年の10月号に「わたしの中の日本人」という、わりあい、『波』の中でも看板のシリーズだったんです。そこで書いたもので、タイトルが「モーツァルトか朝日山」っていうんです。おそらく……ご実家がお酒を造るか商うお家でしょう？……だから、田畑さんから「朝日山」っていう……お酒の名前？それが記憶の中に残っているんですよね。(註10)

田畑あきら子。新潟県西蒲原郡巻町に生まれ、武蔵野美術大学洋画科卒業。1969年8月27日、癌のため満28歳で死す。

小柄で、髪はオカッパ頭にし、鼻筋のおったやや繊細な顔だち、話したときには、気だるく甘ったるい感じの声をして、やや受けぐち気味のくちびる、そしてなによりも激情家であることをしめす、伏し目がちだが、突き刺すような視線の持ち主。

——うん、言えてると思いますねえ。

彼女の最初の個展（といっても彼女の個展はこれだけだが）は、1968年4月銀座東7丁目のサトウ画廊で開催された。画材店の奥のスペースに絵をならべて、不安そうにチョココンと腰かけて人を待っていた姿が印象的だった。

——読んでいて、その姿がふっと浮かんできますね。

不安そうで、人なつこく、スキャンダラスなことも好き。それでいて古風な感じもあたえる。酒場にも気軽につきあって、坐っていた。

——何とも言えない静けさを感じているんですねえ。

個展から約半年後、田畑あきら子は、次の個展の準備をしはじめていたが、多分絵のことを考え、仕事（彼女は武蔵野美術大学図書館の司書をしていた）のあいまでの制作に熱中しすぎたせいだろう、身体をこわしてしまっていた。その経過は彼女がときどきよこす手紙で私には判っていたような気がする。

吉祥寺の喫茶店で田畑あきら子と会ったとき、私はそのころ美術雑誌の編集者をしていたので、なにかアドバイスをしたのを覚えているが、主として茫漠とした、色のこと、宇宙のこと、彼女が自動車修理工場からひろってきた廃物のことなど……

——こういうオブジェ性があるんだよね。



『雪野』1983年、文藝春秋
赤瀬川原平が尾辻克彦のペンネームで書いた自伝的小説。第5回野間文芸新人賞受賞作。

註9 1957年に設立された武蔵野美術短期大学は、当初、デザイナー養成に特化していた学校で、美術科油絵専攻が設けられたのは1963年からであった。「ムサビ」の学校史や本人の著述とも照合すると、渡辺隆次は、武蔵野美術学校図画工作教員養成科（2年課程）を卒業後、本科西洋画科の3年次に編入、田畑あきら子と出会った、というのが事実関係として精確である。

註10 田畑あきら子の実家は「田畑酒や」という酒店を営んでいる。

……途方もなく夢み心地な会話であった。

——何かねえ、バックミラーを拾ってきやがったの、あれは忘れられないなあ。

吉祥寺駅前で別れるとき、彼女は腰の痛みのせいであろうか、足をひきずるように歩いていた。すでに病が彼女の身体をむしばみはじめていたのである。

それから半年あまり、彼女が新潟大学附属病院で死ぬまでのあいだ、彼女との手紙のやりとりのなかで知った、爆発的な生命の躍動を何と形容したらよいのだろうか、それはすさまじいもので、彼女のたましいにひかれるようにして、上越線にのり、わたしは新潟へ行ったのだった。

何となくね、別に「W氏」のような、そういう関係ではなかったけれども、やはり……魂、というしかないなあ……それが持っている炎のようなものに、いかに惹かれていたか。それから拾ってきたバックミラーのことを話している時に気が付きましたけれど、いつだったか、「家の傍に凄く変なモノが出来て、何か宇宙的なクモの巣みたいなモノができたのよ！」って興奮して話してて、それは街中に出来たゴルフ練習場だったらしい。その事を、全然違う別の眼で見て、それを私に伝えてきていました。そういう時々の驚きみたいなもの、それは絵の中でオブジェにはなっていないけれども、絵の中に現れてくる、あのかたちや、かたちが向こうへ行こうとしていたりこっちへ出て来ようとしていたりする、ああいう運動の中にそれがありませんね。



大倉

お話を聞いていて思ったのですが、60年代の終わり頃に東京で結構「もの派」の人たちが活躍されていて、確か李禹煥さんもサトウ画廊で、田畑さんとそれほど変わらない時期に最初の個展を開いているんですね。田畑さんのハートのオブジェの話は、当時、吉増さんだけではなくて、いろんな人が大変強烈な印象を受けた、という話を私もお聞きしています。田畑さんの絵も言葉も、亡くなられて40年が経って、私が初めて知ってからも三十数年が経って、あらためて見て、全然古くないって……何だろう、あの時の自分の事とか、気持ちとかを謳っているというよりも、もっと突き放してというのか、絵も言葉も自分から切り離されたモノみたいな眼で接していた、その新鮮さが今も彼女の作品を、絵も言葉も古びさせない部分なんじゃないかと、今お話を聞いていて思いました。吉増さんの言葉の中で「激しさ」と「静けさ」というのが印象的です。

吉増

さらに読んでいきますとね……手紙を引用しているんだけど……

「月が小舟に座礁して不安です」

——って、これは……こう、書き出されたら……。まあ、お互いに詩を書いているから、そういうやり取りは、言語の激しさもあるけれども……

と書きはじめる葉書がきたのは秋だったか、冬には、雪がふると北国生まれの彼女は興奮して「広重を素足で歩いたんだわ！」と書いてきたのだった。

——これは、巻へ、こっちへ帰って来る時にね、景色を見ながらそういう表現をした。

それは憶えています。だから何度も……どうしてあんなにしょっちゅう帰ってたんだろうなあ？……「W氏」と何か仲が悪くなる度に帰ってたのか、だけどその度に来る言葉が、ちょっとやっぱり……大倉さんが言ったように、古びさせないような、透明感のある深いものがありましたね。

大倉

今回、『遺稿集』に亡くなる年の手紙が沢山収録されているんですが、もしかするとそういう手紙は省いてあるのかもしれませんが、病気になられて、つらい、不安な気持ちで沢山あったと思いますけれども、それをそのまま書いたような手紙が一つも無くて、吉増さんが読んだような、本当にそれ自体が詩のようにも思える手紙をいろんな方に送っている。28歳。癌で死を意識していたと思いますけれど、その時にそのような言葉を書ける、その田畑さんという人間にあらためて興味が向き始めているんですけども……不思議ですね……。『遺稿集』の最後で石崎さんという方が書いている文章の中に、亡くなる直前に田畑さんを訪ねた時にこのような話をしたという事が書いてあって、私もちょっと読ませていただきたいんですが、それがあらためて今、すごく印象的です。

病室の窓からは空しか見えなかった。時折、海鳥が姿を見せた。彼女は話した。「……わたしはもう絵筆が持てない。物を視ることに堪えられないし、腕に力もない。だから、わたしの頭の中で絵を描いている。今、ひとつのイメージが出来ている。そのイメージを命ある限り育て、追求したい。そのイメージが完成した時にわたしは死ぬでしょう……。わたしは大きな白いカモメに乗って、大空を飛翔する。そして、白い雲を越えて飛んでいき、大空の一角に着くと、そこには透明な水晶の階段があり、天に向かって限りなく続いている。その階段を登りつめると、宮殿があるの。ギリシアのパンテオンのように水晶の円柱の乱立する宮殿。その宮殿の中ほどに庭があり、わたしは、水晶の椅子に腰をおろして、その庭を掘っている。何を掘り出したと思う？ それは、黄金の王冠。絶対に、黄金の王冠。わたしのイメージは、その黄金の冠を手にしたところまで出来たわ……。」

(註11)

——ということですね、石崎さんが書いています。亡くなる少し前に、3時間、病室で話された、ということを考えて……

吉増

このあと、ご紹介してお姉さんにもお話を聞いてみたいけど……私もその『遺稿集』に文を書いているね、それで……ああ、飛行機に乗れたんだ、プロペラで……YS-11で。それで、大学病院で「良かったじゃないか、飛行機に乗れたじゃないか」なんて言ったら、「青、青がいいわ！青だわ！」って言って、何かしきりに喋っていた。それを思い出した。今、大倉さんが読んでくださった言葉を聞きながら、一方では、「いのちはフカにくれてやる」なんていう、そういう事も書いているよね。だから……今日は大事なお話で、大倉さんも私も、二度と無いような、しかし、何とかこの稀有な人を支えようと思って、言葉を出していますけれども……あの……やはり、こう……こすり出すようにして、宙ぶらりんの命を、押さえつけたり……押さえつけたり、泡立てたりしてたんだねえ。

大倉

最初、私は洲之内さんの言葉にひかれて田畑さんに出会い、絵に惹かれ、言葉に惹かれましたけれど、今は人間にとっても惹かれて……。人間と、絵と、言葉というのがすごく一体のもの、という気があらためてしているんですね。

吉増

そうねえ。どなたかが、お書きになっていたけど、やはり、魂の状態みたいなものは絵に出てくるんだよね……。

註11 パンテオン（万神殿）として名高いのは、ローマのマルス広場にある古代ローマ帝国時代の建物であるが、「ギリシアの…」と前置きする場合、イメージを一般に広く共有出来るような建築遺構は見当たらない。原典の『遺稿集』での表記は「パンテオン」であるが、文意上ここではギリシアのアテネに建つ「パルテノン」（下図）が本来であった可能性を付記しておく。



大倉

吉増さんが仰った「命の光」というのが、そうだと思います。

吉増

本当、そうだなあ……。新幹線の中で考えていたのですけどね、どうして、こんな青春時代になったのだろう？……しかも今頃になって、75歳にもなって絵を習おうなんて気持ちになったのだろう……これ、もう500枚くらいになりますけど、毎日、毎日、こんな事をやっているんだよね。何枚も紙を貼ってね……それで濡らして、吉本隆明さんの詩を書いて、その上に自分の字を貼り付けて、こすったりしてやっている。(註12) こんな事をやるっていうのも、何かやっぱり、50年の見えない命の声があるんですよ。それでひとつ言っておきたいのは、新幹線の中ではとつするの……こういう時にだけしかわからない事なんだなあ……瀧口修造さんが亡くなられた1979年、その時に、お葬式の後、一番親しい友人だった岡田隆彦っていう美術評論家がいましてけれどね、彼の家に、荒川修作夫妻と私が呼ばれて、瀧口さんを偲んでお酒を呑む機会があったんですよ。それで何の拍子か、荒川がヴィトゲンシュタインかなんかを引いて「死というものは存在しないんだ」なんて、しきりに大きな声で言った。それで、私は結構おとなしい方なんだけど激怒しちゃって、「てめえ、この野郎！」って、もう大げんかになって。その時の事を今日思い起こして……その前に、田畑あきら子も私も荒川の作品を非常に評価しているんだっていう事は、前もって伝えてあった(註13)。荒川も知ってた。しかし、その時に「死というものは存在しないんだ」って言われた時に私が激昂したのは、その瞬間に……傍に田畑あきら子が居たんだなあ……亡くなって10年でしたけどね。何かね、私自身にも激昂する理由があったけれども、その時に、田畑あきら子が私の傍に居たなあ、って気がした。それは、真っ白い画面に……まあ、荒川修作の場合は指示表出の言語になっているけどね、そういう言語じゃなくて、吉本隆明の言い方をすれば自己表出みたいな、変な所から湧いてくる言語、それが命なんだけれど。そういう点において、「てめえ荒川、てめえよりも……！」という気持ちが走ったんだらうという……そういう事を言ってみてもいいなあ、というふうに新幹線の中で感じていました。

大倉

ちょっと洲之内さんの話に戻してみると……1969年というのは、田畑さんが8月に亡くなっていますけれども、実はその同じ年に洲之内徹さんは佐藤哲三という新潟の画家の絵に出会って、9月に新潟に来ているんですね。(註14) その年の暮れに「佐藤哲三遺作展」を現代画廊で開催した。洲之内さんと現代画廊にとってもその後の転機となるメモリアルな展覧会だったんですけども、その同じ69年に田畑さんが亡くなっていた、という事を今回あらためて印象深く思いました。

吉増

洲之内さんっていうのは大変な人だねえ。展覧会に原稿が出ていて……「気まぐれ美術館」の第何回目かなあ、鳥海青児の絵と出会った時の事だったかな、(註15)「盗んでも自分のものにしたくなる絵」か……本当、そうだなあ。それは、自分の存在に対してもそういう事を言ってもいいんじゃないかなあ……。50年経ってみると、歴然と命の光がそこに在るのが判るけれども、生きていた私もまた、それを感じているんだらうなあ。自分の命を盗んで持って帰るような……そんな気もするなあ。だけど……あの6点の作品は素晴らしいねえ……。

註12 吉増が当日持参しここで取り出して見せたのは、2年後の東京国立近代美術館での展覧会「声ノマ 全身詩人 吉増剛造展」(2016年6月7日～8月7日)で「怪物君」と題して展示された作品群の一部である。

註13 「遺稿集」に収録された「[ブルーの質問書]による、田畑あきら子の解答。1968年5月。」の中では、好きな芸術家として、アーシル・ゴッシー、フランツ・カフカと並んで荒川修作の名前が挙げられている。

註14 「五十代の終わり頃から六十代にかけての十年余り、私の身の上で起ったことすべての背景には新潟がある。」と言った洲之内徹の、新潟との所縁を決定づけた機会。この時の新潟行は、『芸術新潮』1969年12月号に掲載されたエッセイ「北越に埋もれた鬼才・佐藤哲三」で詳述されている。

註15 「買えなければ盗んでも自分のものにしたくなるような絵なら、まちがいない絵である」
洲之内徹のこの有名な言葉は、書き下ろしのエッセイ集『絵の中の散歩』(1973年、新潮社)の中で鳥海青児の絵に絡めて書かれたもの。エッセイ集の好評もあり、翌年「気まぐれ美術館」の連載執筆が始まる。

大倉

洲之内さんは1987年に田畑さんの絵の前に立って、感無量の目で、単に絵がいいとかそういう事じゃないものを感じてたんだろうなあ、と今あらためて思うんですよね。洲之内さんは亡くなる時に田畑あきら子展……「W氏」の所からお姉さんの所に戻って来た、学生時代の素描などを展示する展覧会を企画されていたわけですが、その時に、私は実は洲之内さんが倒れる現場に居たわけですが、倒れる前の晩に田畑さんの話を一緒にしたんですね。その時に、洲之内さんが、明日検査で入院するんだけど、病院へ行ったら原稿を書こうと思う、とその事について、田畑あきら子が亡くなる直前に、病院の窓から火事の火を見て、音の無い火がこう夜の風景の中で燃えているのを見て、「アーシル・ゴーキーがわかった」と言った、という事を洲之内さんは書いているんですけど、田畑あきら子が「アーシル・ゴーキーが見えた」ではなくて「わかった」と言った事について書きたい、って言ってたんです。

吉増

ああ……。

大倉

それを書かずに亡くなってしまったんですけども。洲之内さんは、田畑さんの人間そのものにすごく何かを感じてそれを言葉にされようとしていたんじゃないかなあ、とその事を思い出して考えてたんです。

吉増

私はこの間びっくりしたんだけど、浦上玉堂っていうとんでもない江戸時代の画家がいて、脱藩して酒呑んで七弦琴を弾きながら描いてたヤツで……これは、やっぱり……スピリットで感じるしかないねえ。いや、唐突にそれが出てきたわけじゃなくて、田畑あきら子がここに居たら、「そうよ！ボッスだって、ゴーキーだって、玉堂だって、そうよ！」って言うかもしれない。(註16)

大倉

そうですね。洲之内さんっていう人は、その人の人生から、物語から絵を見る、ということはされなかった人ですけども、あくまでも絵と自分との間で起こることを常にものを感じる原点に置いていたと思いますが、絵と人生を切り離す、というような批評もありますけども、同時に、人間にすごく興味を持った人だったんじゃないかと思えます。

吉増

大倉さんのとてもいいお話につなげてお話ししますが、3.11の大災厄以降、読む本が無くなっちゃって、私はゴッホの日記ばかり読んでいますよ。しばらくゴッホの日記を読んで、ゴッホの絵ばかり見ている、本当にいま大倉さんが言ったように、絵を描くだけじゃなくてね、とにかく、大変な文学者でもありますし、読書家でもあるし、酒飲みでもあるし、とんでもないヤツだけれども、ある日突然ね、自分の描いた絵の前で、起ち上がって、どうしてだか知らないけれど、白い白濁した絵の具を塗りつけた。それを起ち上がってそうやった、っていうのを、田畑あきら子はもっともって繊細で深い根源的に持っているものだけれども、それを見て思い出しました。おそらく、田畑あきら子がこの蒼い線をこすったのを、「少し、広重風に隠したいわ……」っていう声が聞こえるような気がして……あの白さが、あれが命の光なのか



註16 この言及に関連する事柄として、吉増は、2013年11月、倉敷での浦上玉堂シンポジウムに出席、さらに14年7月、岡山県立美術館で玉堂の国宝「凍雲飾雪図」(川端康成記念会蔵)を撮影、gozo Ciné「浦上玉堂の魂の手ノ血が点々と」2014・7・27 岡山、東京」を制作している。

なあ、と思って……そうすると、油絵をやるとあそこまで行けるのかなあ……水彩で白い絵の具でやってもあそこまでいかないなあ……ってそういうことまで考えました。

大倉

田畑さんの油絵については、洲之内さんも書いていますが、すごく厚塗りなんですよね。それで、描くっていうよりも、描いたものを消すような作業が結果的にあのような画面になっている、という感じがあらためて見ていただきますし、洲之内さんが「W氏」から聞いて書いていることですが、学生時代、「W氏」が会った時の田畑さんは、モノを描くだけけれども、だんだん消してしまう。周りで見ているとどかしくなるくらいなかなか形になってこない、そういうことで苦しんでいる……というのかな、周りからそう見えるような時期があった、ということを書いています。

吉増

「こする」という大倉さんが見事に捕まえられたことに近いし、これは根源的なことだけれども、古文書のやり方で「見せ消ち」ってのがあるじゃないですか。わかるように、わかる状態に残したまま書き直していくっていう「見せ消ち」っていうんですけどね。そうやって重ねていくっていうね、こすっていく……そういう事がとっても大事で、これはフロイトのマジック・メモにも言えるけどさ、そういう作業って意識的じゃないんだなあ……彼女にはそれがあるなあ……その皮膚が命の光なんだよなあ、それが（田畑あきら子の）絵なんだなあ……。

大倉

今日は田畑さんのお姉さんの阿部良子さんもお見えです。

吉増

ご紹介しましょう。お久しぶりです……お変わりなく。

阿部良子氏

お久しぶりでございます。今日は本当にいろいろとありがとうございます。

吉増

お姉さんが持っていらっしゃるの、今展示されているうちの、どれ？

阿部良子氏

あの小さいのです。一番左側の油絵。

吉増

ああ……それを、盗っていこうかな。（会場笑い）

いやあ……盗みたくなるっていうのは、いいねえ……ねえ。

阿部良子氏

そうですね……（会場の空間を指さして）その辺りに（田畑あきら子が）居るんじゃないですか。



吉増

居るよお。(会場笑い)

(プロジェクターで投影中の画像を指して) これでは、やっぱり絵面の光だから、本物で見ないと……。これ本物を見たらおそろしいもんなあ……。これ。なんであんな絵になるんだろう……。線が……。本当になんて言うか、不思議なやわらかい線で……。

大倉

洲之内さんは、人間の生い立ちとかそういうところかには触れなかったけれども、絵に惹かれてその人の人生に分け入っていくことをやられたんです。私も今回あらためて言葉と絵を見ながら、田畑さんの人生に分け入りたくなっています。先ほどたまたま高田一葉さんというご親戚(註17)の方とお昼をご一緒していたんですけども、その時に、あきら子さんのお母さんのことを少しかがいました。田畑さんは三人兄弟で、五歳上のお姉さんと一歳下の護人さんという弟さんがいて、護人さんは巻の原発の住民投票の動きの中心になった方でもいらっしゃいますけれども、お父さんは戦争で亡くなられていて、お母さんが大変個性的な方だったという話を先ほどうかがっておりました。あきら子さんの世界というのは、いきなり大学で開いたというのではなくて、もしかしたら、もっと人生を遡るところにまで何かつながっているような気がします。あらためて今日、良子さんに、もしあきら子さんの理解に役立つことがあったら、ぜひお聞かせいただきたい、と思っていたんですけども。

あきらさんが亡くなる前に、お母さんも亡くなられているんですね。

阿部良子氏

そうなんです。はい。

大倉

その頃から、あきら子さんの絵が、私たちの心をつまえるものに、より深くなっていったと思うんですけども、その辺は、身近にいらして、いかがでしたでしょうか？

阿部良子氏

あれ以来、絵は白が中心になりました。がらりと変わって。それからサトウ画廊の展覧会をやりました。

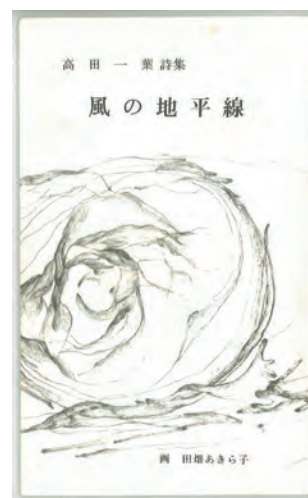
吉増

ああ、なるほどね。やっぱりね。

大倉

今、映像で映っている作品は、たぶん学生の頃のものだと思いますが、まだ、そういう時期のものとは違いますね。吉増さんが「不思議な線」って言った、「速度」っていうのかな、何とも言えない……。スローでもなくスピーディーでもない、不思議な線になってきたのが、その頃かな、と思うんですね。

あきら子さんは亡くなる直前の手紙にも、決してプライベートな事をほとんど書かないけれども、絵の中にすごく、プライベートな現実の経験というのが決して読み取れない形でもつながっている、そんな気がするんですね。



『高田一葉 詩集 風の地平線』1983年

註17 母親が田畑あきら子の従姉妹という間柄。1983年発行の彼女の詩集では、田畑の絵が挿画に使われている。



吉増

皆さん、もう一度、ぜひ田畑あきら子の命の光の前に立って見てください。細かい、何かね、絵肌がモノを言っているから、見てやってください。やっぱり我々は情報言語で複製の時代じゃない？相当、鈍磨しちゃっている。だから、やっぱり自分の眼で本物を触りに行かなければダメね。

(終)

「夭折の画家たち」展資料

田畑あきら子 年譜、解説 ※展覧会パンフレット(1987年1月発行)より再録

田畑あきら子 年譜

- 1940 昭和15 12月14日、父 田畑護良、母 シゲの二女として、西蒲原郡巻町に生まれる。
本名 明(あきら)子。姉1人、弟1人があった。生家は祖父の代からの酒屋。
- 1945 昭和20(5歳) 父、ビルマで戦死。
- 1947 昭和22(7歳) 西蒲原郡巻町立巻小学校に入学。
- 1953 昭和28(13歳) 西蒲原郡巻町立巻中学校に入学。
在学中より詩作をはじめ。 (以後、死の間近かまで断続的に書き続けた。) 読書家であり、運動にもすぐれた生徒であった。
- 1956 昭和31(16歳) 新潟県立巻高等学校に入学。
美術クラブで丸山清六の指導を受ける。家では配達の仕事などを積極的に手伝う。
- 1959 昭和34(19歳) 武蔵野美術大学洋画科に入学。
山口長男、井上長三郎、麻生三郎に師事。
制作のかたわら、国立周辺に居住する学友を中心によく芸術論を戦わせた。セザンヌ、マルセル・デュシャン、ロバート・ラウシェンバーク、ジャスパー・ジョーンズ、ジム・ダイン、アーシル・ゴーキー、荒川修作などに興味をもつ。また喫茶店等でパッハ、モーツァルト、モダンジャズに聴きびたる。(音楽は大きな靈感源となった。)
対象の形を描写的になぞることから次第に離れ、^{オーソペグ}全体的なものを指向して、描く作業と消す作業が拮抗するようになる。
- 1963 昭和38(23歳) 武蔵野美術大学洋画科卒業。
日米仏一美術・デザイン大学作品展に選抜され、卒業制作(「コンポジション」)を出品。
6月、祖母死去。
- 1964 昭和39(24歳) 東京新宿の椿近代画廊でのグループ展に参加。
8月、母発病。
- 1965 昭和40(25歳) 4月、武蔵野美術大学図書館に司書として勤める。
国立でグループ展(「げげんの会」(武蔵野美術大学出身の画家が中心になったグループ))。切り抜きの赤いハートをつけた黒いドレスのオブジェなどを出品した。
椿近代画廊でグループ展(「げげんの会」)。
- 1966 昭和41(26歳) 新潟市でのグループ展に参加。
- 1967 昭和42(27歳) 3月、母の病状悪化のため、休職し、姉とともに看病にあたる。
7月、母死去。



- 9月復職。憑かれたように制作に取りくむ。(素描、水彩、油彩の大作など。)
- 1968 昭和43(28歳) 4月1日~13日、東京銀座のサトウ画廊で、最初で最後となった個展を開く。
- 1969 昭和44 6月にサトウ画廊で2回目の個展をひらく準備をはじめ。3月、新潟大学医学部附属病院で手術。胃癌の末期で余命3ヶ月と診断される。
4月23日、一時退院。病状は悪化の一途をたどる。
6月26日、再入院。
8月27日、同病院で死去。享年28歳。
- 1970 昭和45 8月、「田畑あきら子遺稿集」が友人たちの尽力で刊行され、東京日本橋の田村画廊で遺作展が開かれた。
- 1971 昭和46 遺稿集が発端となり、イチムラデパート新潟店で「田畑あきら子遺作展」が開催される。(8月27日~9月8日)
晩年の素描類が、一括して新潟県美術博物館に収蔵される。
- 1976 昭和51 2月、「芸術新潮」の連載随筆「気まぐれ美術館」(洲之内徹)に、作家と作品が紹介される。
- 1977 昭和52 7月4日~17日、巻町立郷土資料館で「田畑あきら子遺作展」が開催される。
9月12日~10月8日、東京銀座のかんらん舎で「早逝の画家達I 田畑あきら子展」が開催される。遺稿集より抜粋の「田畑あきら子詩集」が発行され、あわせて「みづゑ」11月号に、吉増剛造「田畑あきら子の絵画(火だるまのなかの白い道)」が掲載された。
10月24日~11月15日、新潟市の康画廊で「田畑あきら子展」が開催される。

田畑あきら子の特異な感覚と才能は、生前から、親しい人々の間では高く評価されていた。彼女が28歳で夭折した翌年、友人たちが遺稿集を編み（彼女はすぐれた詩人であり、特異な文章家でもあった。）、東京で遺作展を開いた。遺作展はその翌年には新潟で、さらに死後8年目には巻、東京、新潟の3ヶ所で開かれている。展覧会の開催に尽力した人々のなかには、生前の画家とは面識のなかった者も多かったと聞く。

田畑あきら子について語られ、書かれた言葉の多くは、むしろその絵画の魅力の語り難さを明らかにする。いわば人は、正体を確と見きわめきれないままに、彼女の絵の曖昧でかつ透明な世界の触手に抱き寄せられてしまうかのようだ。

生前を知る人たちの話では、田畑あきら子は一見したところは、むしろ明るく健康的な女性だったという。身体的にも頑健だったことは、例えば、中学時代から運動にすぐれ、高校に進むとオートバイの免許を取り、家業の店の配達をよく手伝う少女だったこと、美大生の頃、アルバイト先で女性たちが戯れに格闘技をしたところ、彼女が一番強かったなどという逸話からもうかがえる。しかし、その一方では、礼儀正しく、古風な面もあった。また、非常な読書家であり、詩人、手紙魔、雑物の収集家、パッサン、モーツァルト、モダンジャズの耽溺者、そして今回展示されるような絵を描く画家であった。彼女の多面的な性格は、ある友人の次のような言葉に印象的に記されている。

「10年近くむかし、国立の喫茶店。妙な女の子を見た。14歳の少女の顔と60歳の老婆の顔が同居している。時には、それがどちらか極端になる。それが彼女だった。」⁽¹⁾

吉増剛造氏は、田畑あきら子にとっては、生れ故郷の新潟（巻）と東京との距離を凝視すること、その間を往復し、移動する時間が重要な（宿命的な）意味をもっていた、と指摘する。異質な世界をかかえ、そのいずれにもこだわりつつ、その間を揺れ動くことに真剣だったということだろうか。遺稿集の「『ブルーストの質問書』による田畑あきら子の解答」で、彼女は感情のおもむくままに出来る人とその反対の人に引かれるが、自分は「ドチラデモナイヨウデ悲しい」と記している。どちらでもないということは、いずれでもあるという意味で、自我が感情的性向とスティックな性向の間で分裂の可能性を孕んでいたことを暗示する。新潟と東京との距離とは、地理上の距離であると同時に、象徴（精神）的な距離でもあったのではないか。

学生時代の素描では、激しい身振りの描線に、同じ

力強さで「消す」作業が重ねられる。画家の眼は、あたかも「実在」と「空無」の両極をせわしく往復することにより、その中間に生成し、漂うものを誘い出そうとするかのようだ。重要な点は、ここでは異方向へ向かう力の拮抗が、生気を生む契機となっていることである。ここに、田畑あきら子の絵画の原点を認めるとすれば、以後の画業は、この特殊な力学をさらに多元化し、複雑にしていく過程だったとは言えないだろうか。

1963～67年に、田畑あきら子は、相次いで肉親や身近かな人の死を経験する。そして67年の母の死の直後から、憑かれたように制作に没頭し、翌年には生前唯一の個展を開いた。田畑あきら子の絵画が、今日、単に60年代のアンフォルメルやアメリカの抽象表現主義の影響を受けた作品という領域を越えた、独特のものとして感じられるのは、この時期以降の作品の存在によるところが大きい。油彩では「白」が多用される。この「白」は、彼女の特徴である消す行為の痕跡だが、同時に雪や雲のような自然のイメージも呼びさます。「自然」はさらに「宇宙」と言い換えることができるだろう。（星のイメージが描かれた作品もある。）線は、初期の素描のエネルギッシュなそれだけでなく、精神が、移動する空間を、触りながら確かめるかのようにゆるやかに引かれる。矢印、記号、文字、人体の器官を連想させる軟質の形態などが画面に散乱し、画家はそれらの間をおもむろに往還しながら、夢のようなイメージを紡ぎだす。

「コンナ形！コノ間ニ在ルモノハ、ココヲNO I トスルト、ココハNO II ノ地点デアロウ。風ノHouseヲNO III トシテダ。コンナ飛バセカタハ？ソコニモアフレデテ、ソレカラ……」⁽²⁾

こんな風につぶやきながら彼女は描いたのだろうか。おそらく、田畑あきら子は、宿命的に抱える自らの生と感覚の多元性を受け入れ、凝視し、その間をためらわずに歩いたのだ。そのことにより、彼女は、いわば精神の中間地帯に広がる多層的なイメージの宇宙を切り拓いた。60年代の美術の多くが過去のものとなった今もなお、田畑あきら子の絵画が新鮮に見えるのは、ほかでもないこのような固有の力学によって、これらの不思議な画面が創られたからだろう。

- (1) 西沢作 「田畑あきら子遺稿集」より
(2) 1968年4月、サトウ画廊での個展の案内状の一節

「夭折の画家たち」展資料

田畑あきら子 全出品作品 (図版+データ)

「夭折の画家たち」展では、生前から没後を通じた田畑あきら子作品の最大規模の展示が実現したが、諸般の事情で展覧会図録を作成しておらず、これまで出品作品の図柄を確認できる公刊資料が存在しなかった。当時の記録等から作品のデータと図柄を照合し、出品作品46点の全容を詳らかにする。

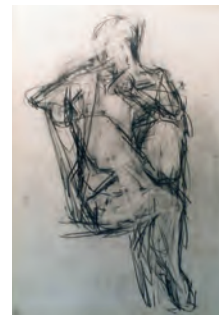
載録にあたっては、作品名、制作年、技法・材質、寸法、所蔵先の表記は、1987年開催当時の出品リストに準拠した。

なお、出品番号はリストの記載順に1~46を新たに付番した。

また、現在No.23、25、28、36、37、40、46は新潟県立近代美術館・万代島美術館、No.38は国立国際美術館の所蔵となっている。



1
手
鉛筆、紙
35×25cm



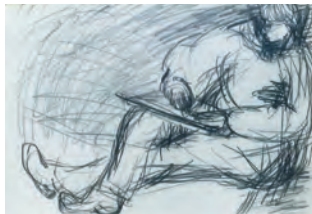
2
すわる裸婦
鉛筆、紙
36×26cm



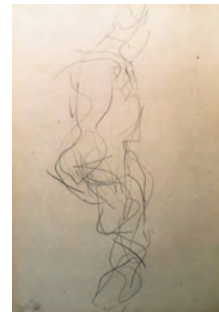
3
裸婦
鉛筆、紙
36×25cm



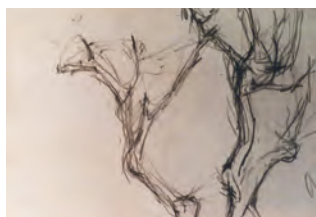
4
人物
鉛筆、紙
35×25cm



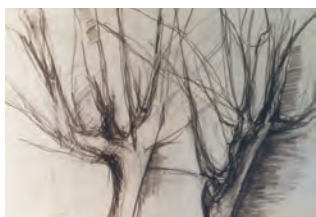
5
素描する人
鉛筆、紙
26×35cm



6
裸婦
鉛筆、紙
36×25cm



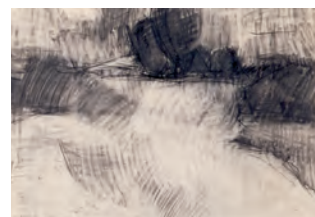
7
樹
鉛筆、紙
23×36cm



8
樹
鉛筆、紙
25×36cm



9
風景
鉛筆、紙
25×35cm



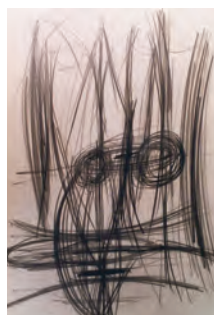
10
風景
鉛筆、紙
25×35cm



11
靴
コンテ、紙
25×35cm



12
作品
コンテ、紙
25×35cm



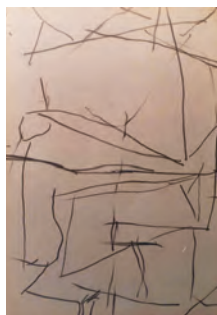
13
素描
鉛筆、紙
35×25cm



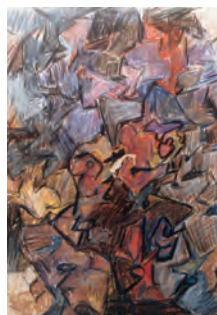
14
作品
コンテ・ペン、紙
25×36cm



15
素描
墨、紙
36×26cm



16
素描
鉛筆、紙
36×26cm



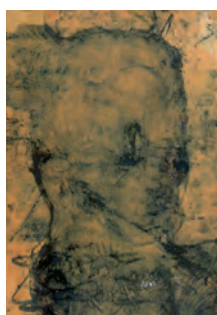
17
作品
パステル・ペン、紙
36×25cm



18
コンポジション
1963年
油彩、カンバス
134×163cm



19
作品
1963年頃
水彩・色鉛筆、紙
36×28cm



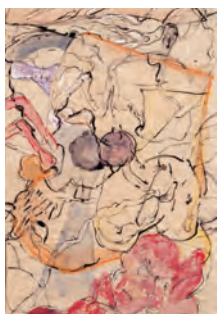
20
作品(顔)
1963年
水彩・パステル、紙
35×25cm



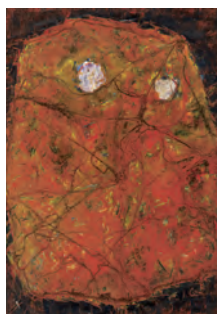
21
白い恐怖
1964年
水彩・パステル、紙
74×53cm



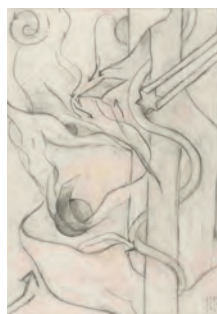
22
なぜに人間に固執する白い恐怖
油彩・鉛筆、紙
75×53cm



23
作品(No.8)
1964-65年
水彩・パステル・墨、紙
89×58cm
新潟県美術館



24
作品
1965-66年頃
油彩・糸、紙
53×38cm



25
作品(No.11)
1966年
鉛筆、紙
33×24cm
新潟県美術館



26
作品
1966年
油彩、カンバス
80×60cm



27
桃山
1966年頃
水彩・クレヨン、紙
87×57cm



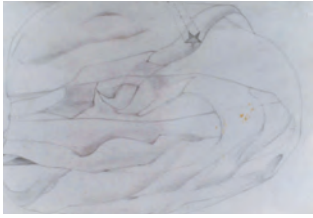
28
作品(No.19)
1967年
鉛筆・色鉛筆、紙
35×24cm
新潟県美術館



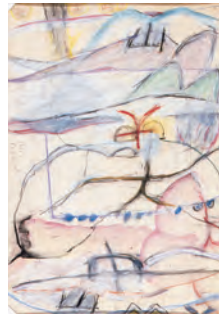
29
作品
1967-68年
色鉛筆、紙
34×24cm



30
作品
パステル・ペン・墨、紙
37×52cm



31
作品
ペン、紙
18×25cm



32
作品
パステル、紙
54×38cm



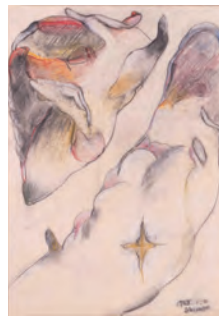
33
作品
パステル、紙
54×38cm



34
作品
パステル、紙
54×38cm



35
作品
油彩・水彩・パステル・ペン・墨、紙
89×57cm



36
作品 (No.32)
1969年
鉛筆・色鉛筆、紙
35×27cm
新潟県美術博物館



37
作品 (No.38)
1969年
鉛筆・色鉛筆、紙
27×38cm
新潟県美術博物館



38
作品
油彩、カンバス
134×163cm



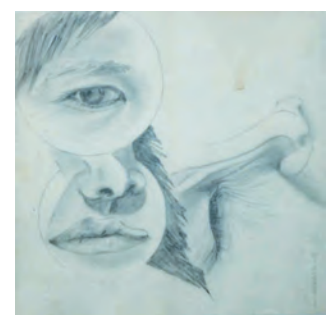
39
作品
油彩、カンバス
145×112cm



40
作品
油彩、カンバス
145×112cm



41
作品
油彩、カンバス
163×130cm



42
自画像
1969年
鉛筆、紙
18×18cm



43
作品 (スケッチブック)
1962-63年
ペン、紙
26×18cm



44
作品 (スケッチブック)
1962-63年
クレヨン、紙
35×28cm



45
作品 (スケッチブック)
1962-63年
油彩、紙
38×30cm



46
詩稿
新潟県美術博物館

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第6号(平成30年度)

Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.6

発行日/2019年3月25日

編集・発行/新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL:025-223-1622

FAX:025-228-3051

印刷/株式会社ウィザップ

ISSN 2187-6770